第16巻6号●通巻第94号●平成6年6月1日発行(毎月1回1日発行)平成7年2月27日第三種郵便物認可

SUPER HEAD MAGAZINE

DOLL

NO.94

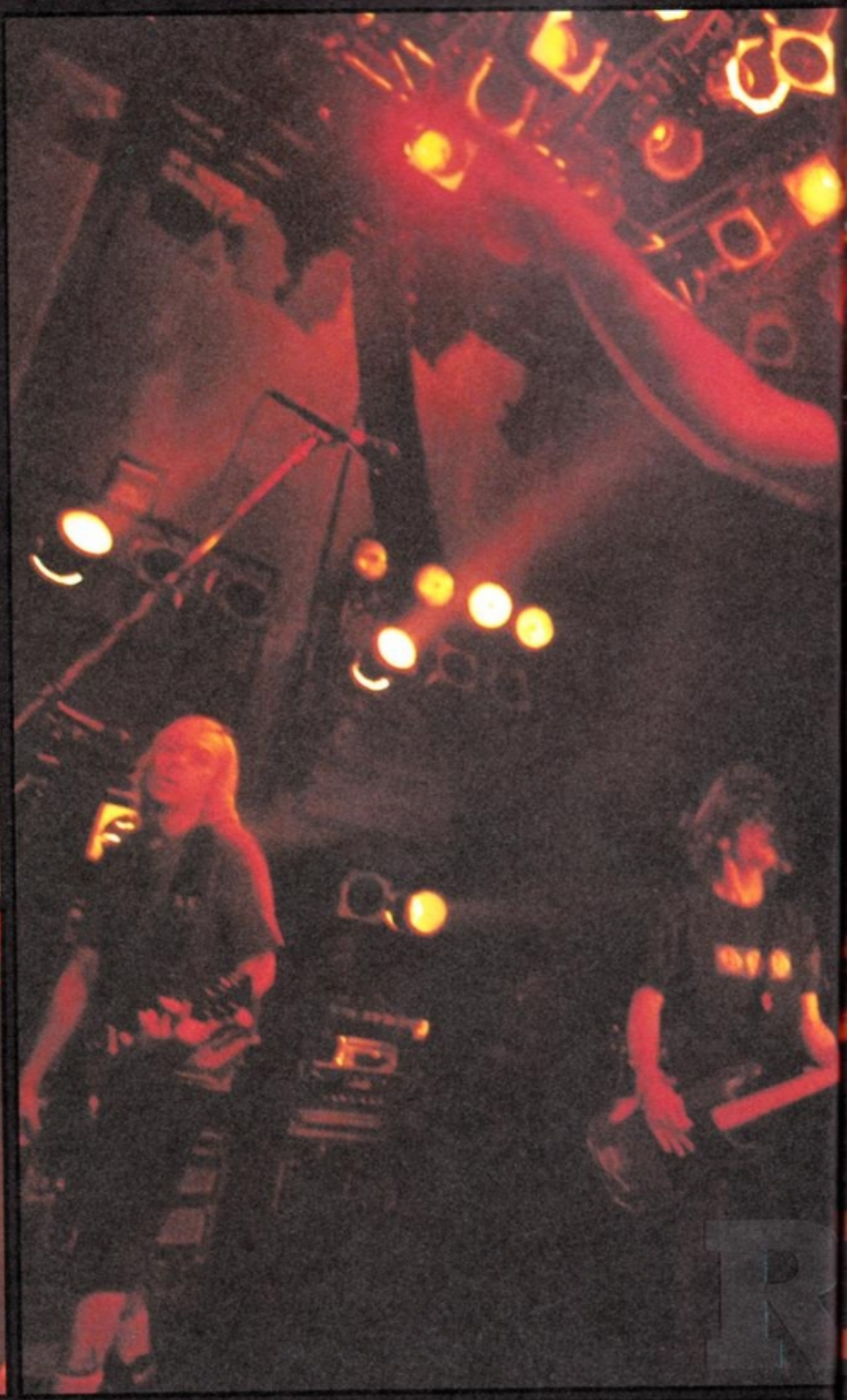
BAD RELIGION
ブラジルのハードコア・バンド

BRAZILIAN HARD CORE SPECIAL!

MUD HONEY
G.I.S.M.
THE STAR CLUB
GIGANTOR
KLINGONZ/NEKROMANTIX
COWS
SMILE
ORANGE 9mm
LENINGRAD COWBOYS
RISE FROM THE DEAD
SUPER JUNKY MONKEY
MARCOSIAS VAMP
仲野 茂バンド

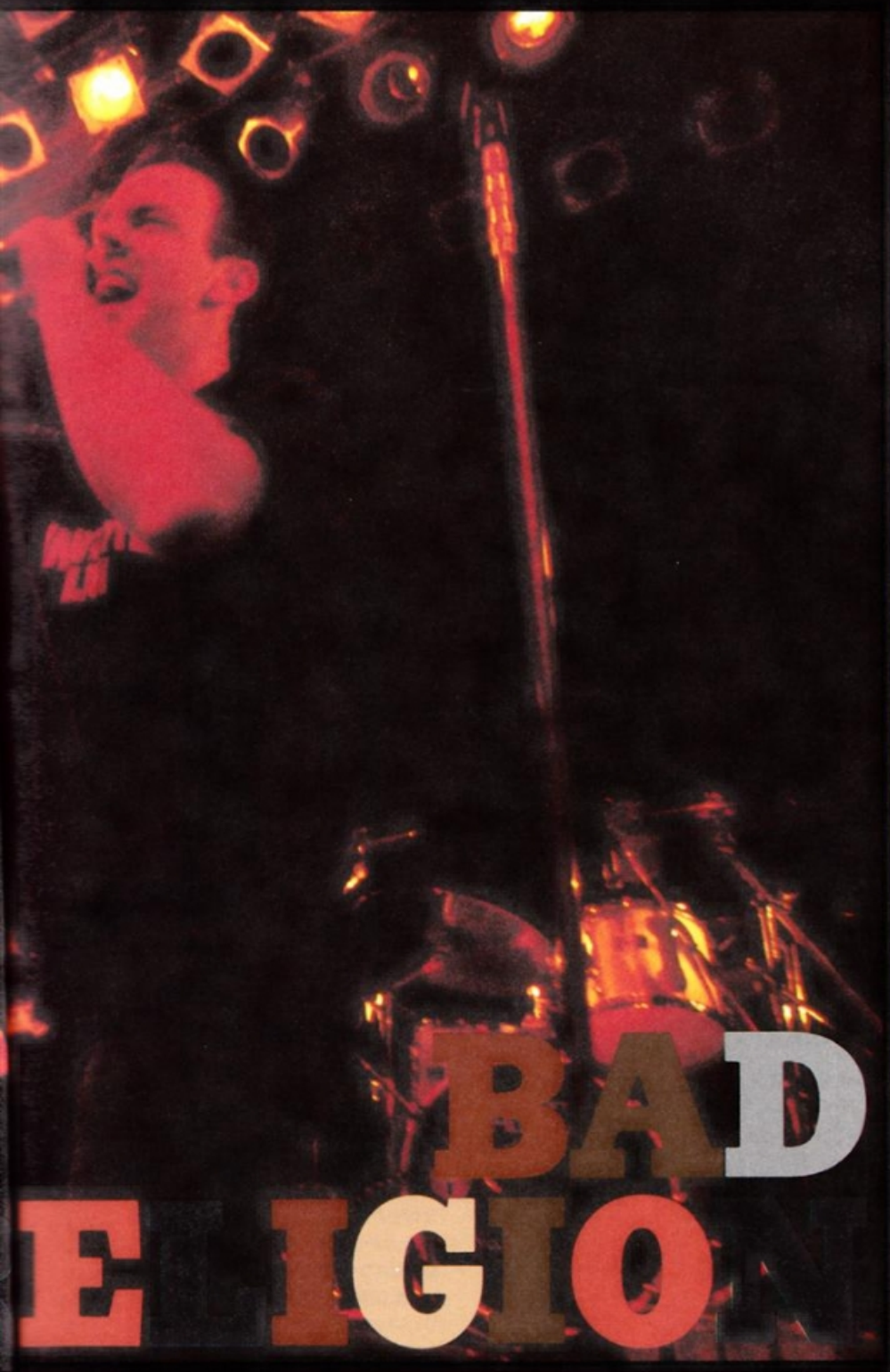
6

1995 June



BAD RELIGION

interview



観衆とバンドの間に区別があってはならない

待望の初来日を果たしたバッド・レリジョン。ライヴでは、30曲もの楽曲をほんの少しMCをはさみながら1時間半ぶっ続けで演奏した。その疾走感みなぎる演奏は、素晴らしいの一言に尽きる。ベーシストのジェイ・ベントレーに話を聞いた。表紙を飾った本誌No.88号を渡すなり、「この写真のみんなの顔、疲れ切ってるだろ？多分、ショウの後に撮ったやつだぜ、ガッハッハッハ」と最初は豪快に切りだす彼ではあったが、メンバー中、唯一の極悪面には似あわない、非常にきっちりとした考え（個人個人で賛同しかねる部分もあるだろうが）を持つ人だという事がよくわかったのだった。

インタヴュー・文●佐藤良樹　通訳●染谷和美　撮影●菊池茂夫

［3月7日／新宿プリンス・ホテル］

——グレッグ・グラフィンと共にあなたもオリジナル・メンバーということで昔の話から聞きたいのですが。

「途中、抜けてたけど、1番最初からいたのは、この2人だね。15年も一緒にやってるからね」

——バッド・レリジョンはどんな感じでできたのでしょうか？

「僕とグレッグ・グラフィンが同じ学校だったんだけども、変な格好（モヒカンにレザー・ジャケット）してるのはこの2人しかいなかった（笑）。6,000人もいる生徒の中で、こんな恰好してるヤツは2人しかいなかったんだ。その他にオリジナル・メンバーだったドラムとか、そういう同じ変な恰好をした連中が集まってできたのがこのバンドなんだよ。こういう恰好をしてるとね、普通の街中の店にも出入りできないくらい、みんなに"お前みたいなヤツは来るな"って言われるようなそういう連中だったんだ。若いうちにそういう恰好をするってことは、1つは人と自分は違うんだっていうことを自分の中でステイトメントとして持ってることでもあるんだけど、僕らみたいにそこから1つ先に進めて、みんなに注目してほしいことプラスみんなに嫌ってもらいたいっていう気持ちもあってそういう恰好をしていたんだ。それでガレージで音楽をやり始めた」

——ロサンゼルスのパンク・バンドに触発されて始めたというのはありますか？

「みんなが思ってる程、ロサンゼルスにそんなにパンク・バンドがいたっていう訳じゃなくて、いいとこ20～50かな、クラブに集まってやってたのは。サークル・ジャークスとかアドレセンツとか。ジャームスもいたけど、ダービーが死んだ後だったし。自分も観に行ったけど、やってる連中、それが同じ友達だったりして、そういう並びだったんだ。僕らが音的に好きだったのは、ラモーンズとクラッシュで、一方ではまぁ、ニール・ヤングとかビートルズとかも好きだったし、ただ叫びまわるだけじゃなくて。それだとずっと聴いてると嫌になっちゃうんでね。歌物っていうものをちゃんと聴いてたよ。叫びばっかり15年って訳にはいかないからね」

——バッド・レリジョンという名前は結構、ヤバかったのでは？

「非難されたことはないよ。宗教熱心な人に反論されたことはあるけど。僕らが言っているバッド・レリジョンという名前は、何だっていいんだ。スピリチュアルな意味での宗教じゃなくてもいい。とにかく盲目に信じちゃってる事、例えば、好きなものに対してあまりにも極端な所までいくと、それは人間にとってフラストレーションとか面倒なことを抱えてしまうことになる。そういう意味も含めてバッド・レリジョンと呼んでいるんだ。何でもいいんだ。盲目的に信じてしまっているもの、そういう意味で言ってるから。そういうことで特に非難されたことはない」

——当時のバイオレントなオーディエンスの前で演奏するのは結構、度胸がいったのでは？

「パンクにつきもののスラム・ダンスは常にあったし、その程度だったら自分達のショウの1部だったんだ。だけど、時々、君が言った通り、凄くバイオレントな状態、喧嘩みたいなことが、僕らが演奏してる時に起きると（僕らは）ステージを降りちゃうんだ。彼らが暴れる

為に演奏してる訳ではないから。でも、ああいうモッシュ・ピットとかってユニークな儀式だとは思うよ。15年間、ずっと見てるけど、みんなが飛び込むと誰かが必ず起こしてやって、で、また誰かがステージに上がって飛び込むという風にみんなで結構、救け合ってるじゃないか。ああいうのって凄く特別な社交的な行為のような感じがする。パンク・ロックってそもそもお客さんとバンドの間にある壁を倒すっていう、そこから始まってるものだから。バンド・イコールお客、お客イコール・バンドみたいな、単に5人の人間を観に1,000人が集まるという図式ではなく、1,000人プラス5人でみんなで部屋の中で楽しくやろうっていうのがパンクな訳で。だから、それを忘れてね、一方的にみんなが殴り合うっていう風になったら、それは全然理論に反すると思う」

――ファースト・シングルを出した時に、遂に自分達の作品を出したなという感慨めいたものはありましたか？

「テープを作ってレコード会社に持ってってこれ出してくれって言ったら断わられて、それだったら、レコード会社がやれることだったら僕らにもやれないことはないじゃないかということで、自分達でレコードを作る方法を勉強して、それで作ったんだ。お店に持ってって置かせてもらったんだ。売れた分だけお金をもらってダメだったら引き取ると。そうやって自分達の作品を作っちゃった後、すでに次のファースト・アルバムの作業に動いちゃってたから、改めてシングルを作った後の感慨にふけるような時間ていうのが特に無かった」

――最初のテープはどこのレーベルに持っていったんですか？

「そんなの憶えてないよ。でもあえて思い出すなら、SSTとオルタナティヴ・テンタクルズとフロンティアかな。SSTのグレッグ・ギンに話をしたのは確かに憶えているけど。で、オルタナティヴ・テンタクルズはジェロ・ビアフラに直接、話をしたかどうかは、記憶してないけど、話をしたとしたら、最初の7インチを出した後だったな。フロンティアはサークル・ジャークスとか持ってたレーベルだけど、そこのグレッグがバッド・レリジョンのテープの段階でラジオでかけてくれた最初の人なんだ。"バッド・レリジョンっていうバンドがあって気に入ってる"っていう感じで紹介してくれて。レーベルにも押してくれたんだけども結局、認めてもらえなかった」

――それで、自分達で作ったレコードの反応は、どうだったんですか？

「7インチとかは、1,500枚くらいしか作らなかったからそんなに沢山の人が聴いた訳じゃないはずなんだけど、当初の反応は凄く良かったよ。で、とりあえず、クラブで演奏すれば、いつも500人～600人とかそのくらいの人達は必ず来てくれた。そういった固定客がすでについていたので、それもあったかもしれないけど。それで、そのラジオにかけてもらった時にね、翌日学校に行ったら、みんなきのうまでは、"お前らみたいなパンク・ロッカーは嫌いだ"なんて言ってたヤツが急に"今日から友達だ"って言ってきて、まあ15歳くらいの頃の話なんだけど、要するに人っていうのは、俺達を知らなかった人、パンク・ロックとは何かを知らなかった人がラジオであの曲

interview BAD RELIGION

を聴いただけでね、友達だって言ってきたってことは、要するにラジオでかかるのは人気者だからだと思って寄ってきたんだろうな。別にあいつらが俺達のやってることを気に入ってくれたんじゃないんだ。だから15歳にして、もの凄く貴重な人生の教訓を学んだと思う。で、別に自分達が人と違う扱い方をしてもらいたいから、こういうことをやってる訳じゃないんだ。パンク・ロックとはすなわちそういうもので、要するにお客さんとバンドの間に区別があってはならない。同じであるべきだという風に思ってたから、すでにみんなにチヤホヤされた段階で凄く嫌気がさしてきた。その時点で凄くいい教訓を得た」

――今なんか、凄い人気で大変でしょうね。

「そうだね。どんどんビッグになって段々、対処が難しくなってきた。最近、15歳くらいのキッズがね、"ファンなんだよ"って言ってきてくれるんだけど、そういうキッズに言ってやるんだ。"僕らが15歳だった時、君達は0歳だったんだよ"と。この段階で彼らに教えてやるんだ。"とにかく僕らと君達との間に何も違いはないんだよ"ってね。同じレベルだということをよく言ってあげるんだよ。ただね、バンド自体が大きくなる事については全然抵抗はないんだ。バンドはどんどん大きくなるだけなっていいと思うんだけども、人からの扱われ方が変わってくるのは、よくないことだと思う」

――なるほど。まあ、これだけビッグな存在になると中傷とかもあるでしょうしね。

「若いうちは全然、気付かなかったけど、最近、分かってきたけど、エンターテイメントっていう形式の中で、結構巻き込まれてしまっているっていうこと。バンドに対して不必要なプレッシャーを周りがどんどんかけてくる。で、その結果、自分達の存在ていうのがね、1つの政治家のような、ポリティシャンのようなものにされてしまっている。そういうことが最近、だんだん分かってきた。もう1つ気付くのが、自分達に寄ってくる人達の数がどんどん増えていってるんだけど、"好きだ"と言ってきてくれる人と"お前らなんか嫌いだ"と言ってくる人の割合を比べたらね、同じなんじゃないかと。同じずつどんどん増えていっている。全体ひっくるめたら、その数は確かに増えていってるけど、好きっていう人も嫌いっていう人もどんどん増えていってるんじゃないかな」

――ブレットが抜けたことで、次回作で、バッド・レリジョンの真価が問われるのではということも言われたりもするのでは？

「自分としてはね、ブレットがメインのコンポーザーだったと特に思っていない。バック・カタログをずっと調べてもらえば、分かると思うけど。グレッグ・グラフィンが70%位、ブレットが30%位の割合で曲を書いてたからね。だからといって、ブレットもいいコンポーザーだったから、その辺を軽んじる気はないけれど。メンバーが変わっても、バンド自体は全然変わっていない。バンドは個人で存在しているものではなくて、あくまで、バッド・レリジョン。バッド・レリジョンが例えば、誰々をフィーチャーしてるとかじゃなくて、あくまで、4、5人の同じ特定の、同じタイプの音楽が好きな連中が集まって、こういうバンドになってる訳だから。その中において、グレッグ・グラフィンはたまたま歌が得意だから、歌を歌い、ブライアンも入ったばっかりなのに、驚く程、仕事をしてくれてるし。さっきも言った通りに、好きだといってくれる人と嫌いだといってくれる人の割合自体、半々くらいで、割合としては同じくらいなんだ。どちらもどんどん数は増えていってるけど。僕らはバンドとしても、他の人に気に入ってもらう為にやってるんじゃなくて、楽しくやれればいい。やった結果、副産物として他の人が好きだといってくれりゃあ、それは素晴らしいことだし。それを嫌いだっていう人がいても全然気にしないよ」

――ところで、途中、あなたはバンドを離れたとおっしゃいましたが、それは何故？

「ファースト・アルバムを出した後、あたりから、自分の音楽性がどうも(バンドと)合わなくなってきた。で、とりあえず、それでバンドを抜けたんだけども、僕が抜けてバンドが解散したかというと、そういう訳じゃなくて、さっきも言った通り、誰がバンドをやってるかは特に問題じゃなくて、バンド自体は存在していた。僕がやめた時に僕の知り合いを代わりに入れることがすぐに決まってたんで、僕が彼に曲を教えてあげたりして、友交的に別れたんだよ。その当時、僕は18歳ぐらいだったんだけど僕自身、自分の人生をちょっと考えたいというのもあって、グレッグ・グラフィンも学校に専念したいというのもあって、夏休みだけ、できる時だけ、やろうという形になっていた。ほんの少ししかやる機会はなかったけど。ツアーも本当にホピー状態だったし。自分はその間、いろんな仕事をやってたよ。洋服屋でヨージ・ヤマモトとかジュンを売ってたり、セブン・イレブン・タイプのコンビニエンス・ストアーで働いたりとか、映画のスタントでバイクの運転をやったりとか。それとエピタフの仕事ももちろんやった訳だけど、そういうことをやってるうちに86年になるに至って自分もいろんな事をやってきたんだけど、やっぱりバンドがいかに楽しいかってことが改めて分かってきたんだよ。グレッグもピート・ファインストーンもその頃には自分達のバンドをしっかりやりたいという気持ちになってきて、それで『サッファー』のアルバを作る時にみんなが戻ってきたんだ。みんなその間、いろんな事を経験してきたから、自分達がいかに楽しんでやってるかってことを凄く実感した」

――だから、あのアルバムは凄くいいアルバムになった訳ですか。

「イエス」

――ベース・プレイヤー以外にあなたのバンド内での役割は？

「批評家(笑)。スタジオでは、ずっとダメダメダメって言ってるけど」

――きびしいですね。

「僕自身、本当にこのバンドは好きだけど、ある意味でどんどんそのまま助長していけばいいという態度にえてして陥りがちだろ？僕は割とそこに歯止めをかけたいんだ。でも、ほっといたら、どんどん悪い方向に行っちゃうのかっていったら、そんなことはない。別の意味で良い方向に向かうのかもしれないけど、僕はあくまでこうした方がいいってことを遠慮無く、指摘させてもらってるだけで。ブライアンが入ったことでバンドの状態が親密になってきた。昔のグレッグ・グラフィンとブレットというのは、互いに全然話をしなかった。自分がエピタフで仕事をしながら、グレッグ・グラフィンにバンドの状態を伝えてあげたり、仲介人みたいな役割を果していた。それと音楽はビジネスに走ってはいけないもので、良い音楽を作る為に、音楽とビジネスにはっきりと線を引いてあげるのが、自分の役割なんだ」

――それで、ソニー／アトランティックに移ったのは？

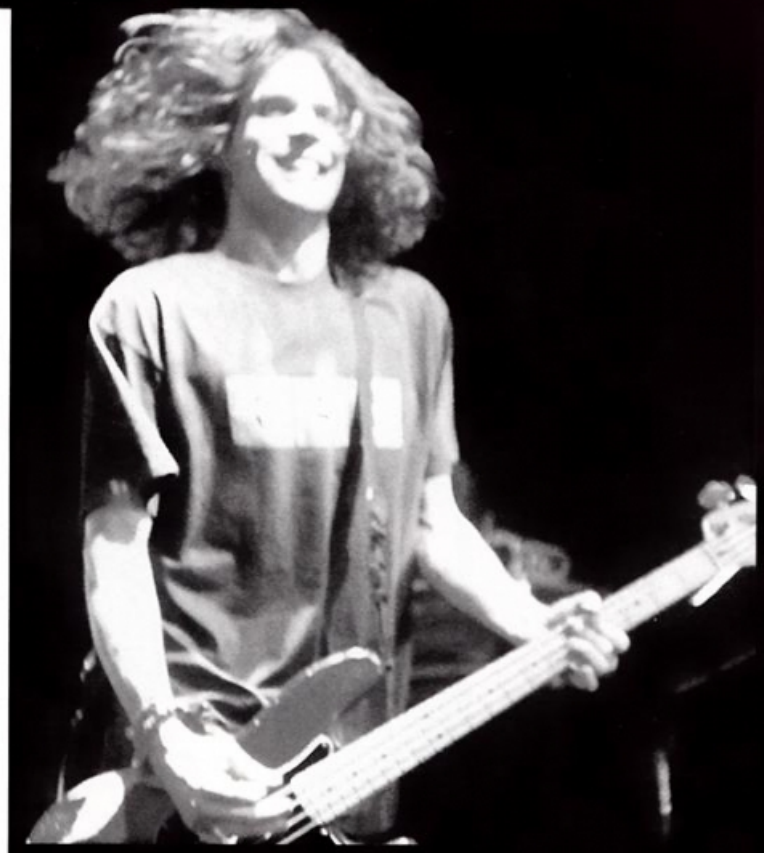
「(メジャー契約に関して)一人でも反対者がいたらやらないよと。契約書は全員のサインが必要だからね。一人でも嫌だっていうやつがいたらあくまで話し合いをするということになってた。だから今回のことは、みんなの合意があってのこと。で、これは音楽とビジネスを分ける為の究極の手段だった。ツアー、曲作り、バンドっていうことに専念できるように、その他の事はビジネスとして、誰かに任せてしまおうということになった。レーベル(エピタフ)もバンド(バッド・レリジョン)もどんどんビッグになったとき、そこに軋轢が生じてしまうから、今自分にとってどっちが大事かなってことを考えたときに、バンドをやることの方が大事だと思った。それで、ビジネス関係は誰かに任せてしまおうという結論になった」

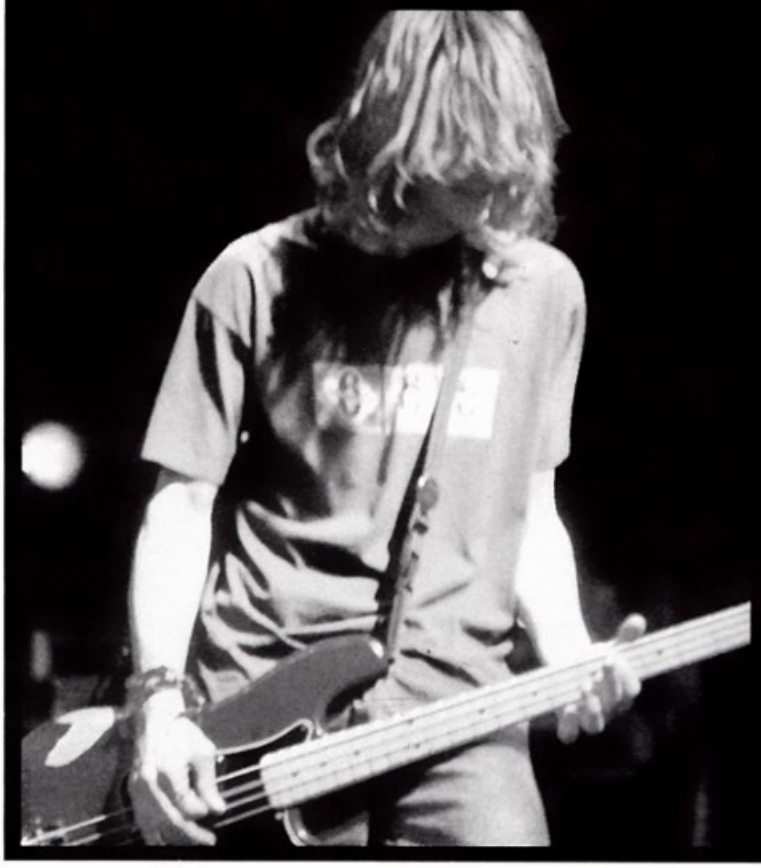
――エピタフから出している頃は自分達で全てコントロールできたと思うのですが、現在は、他の人に任せることによって自分達では、全てを把握できないのでは？

「今回の契約に関しては、全部自分達で握っちゃってて、むしろ、よりコントロールを握ってると言えるんじゃないかな。僕らがレコードを作って、完パケしたものを渡して、あとは、これを売ってくれと。エピタフの頃は100%コントロールしてたけど、日本とかオーストラリアとかだと向こうから、何枚くれっていわれて、それを送る。そういうやり方だったんだけど、今回は全然、そんなんじゃない。自分達がもし、直接、オーストラリアのお店と話をする機会があったとする、そこに自分達のレコードが入ってないと分かったら、"そこのお店にレコードが入ってないぞ"っていう風にレコード会社にさっそく入れさせることもできる。よりコントロールを持ったといえるんじゃないかな」

――現在、あなたは、30歳ということですが、ツアーは体力的につらい部分はありますか？

「今回、7ヶ月のツアーを行っているんだけど今までで一番長いんじゃないかな。でも全然問題ないよ。88年に初めてツアーをやったんだけど、それはバンドを始めて8年経ってからで、バンドをやり始めた頃って、皆若くて何もわからなかった。それでやっと88年に1ヶ月半かけてアメリカを回ったんだけどあれが一番つらかった。今考えると最初のツアーは10人の野郎共がバンに乗っかって、回ったんだ。それに1日に必ず何かしら変な間違いがおこるし。あれに比べたら今回なんかまだまだ楽な方なんだ」





――今はロサンゼルスに住んでるんですか？

「家族は基本的にカナダのヴァンクーヴァーに住んでるんだ。息子も2人いるんだ。ニューヨークへツアーに行ったら妻が飛んできてくれたりとか、ロサンゼルスへツアーに行った時には、子供連れで一緒にきてくれる。3週間～4週間ぐらいおきに家族とあうようにしているんだ。でも実際は難しいね」

――話は変わりますけど、ブライアン・ベイカーはどういういきさつでパーマネント・メンバーになったのですか？

「前から知り合いだったんだ。エピタフから出てるダグ・ナスティのメンバーだったし。その前のマイナー・スレットの時代から彼のことはこっちは知ってたし。そんな親しい仲ではなかったけども、ブレットがとりあえず、やめるっていう話にいきなりなった時に、2人のグレッグと電話でさんざん話をして、どうしようかと。バンドとしてどうしようかって悩んだ人は誰もいなかった。誰を入れようかと

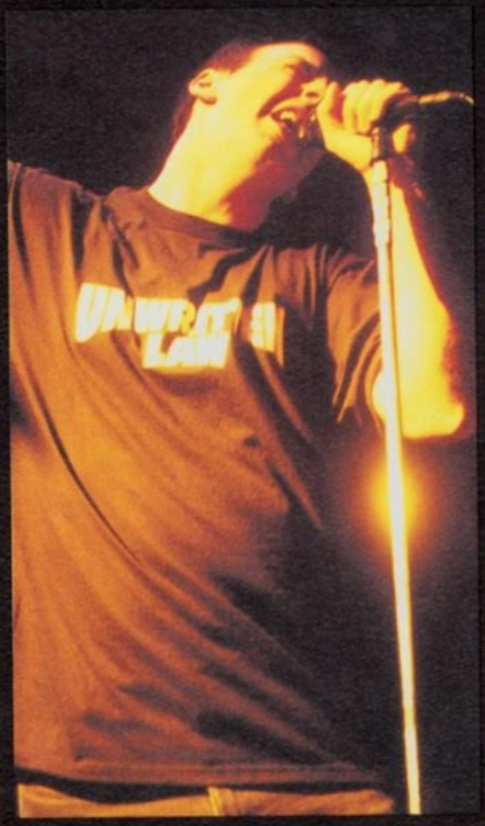
いうことで悩んだだけで。それで、ブライアンに電話して2時間後にはもうバンドのメンバーに決まってた」

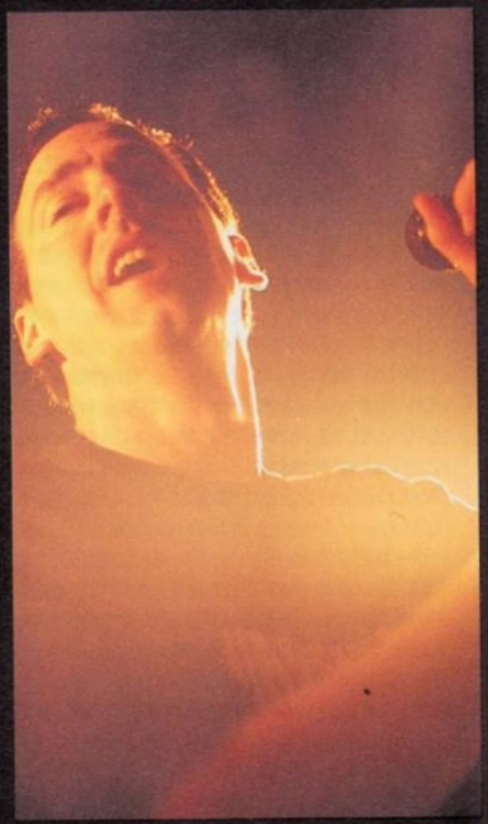
――次のアルバムはいつ頃出るんですか？

「すでに12曲できているんだ。ちゃんとしたアルバム用ではないんだけど、デモとかそういう形で、テープを送り合ってやってるんだ。そういう形ではしょっちゅう曲はできあがってるんだ。多分、10月頃には出るんじゃないかな。人気が出てくるってことは、ライヴもやらなきゃいけない場所も増えるってことで、昔は2ヶ月くらいあちこち回れば、観たいっていう人はみんな観られたと思うんだ。最近は日本にも来て、オーストラリア、ハワイ、アラスカ、グリーンランドとかあちこち行かなきゃいけない訳で、アルバムを作ろうとなったときに、電話がリーンとなってね、電話にでたら、スウェーデンでフェスティヴァルがあるんだけど来てくれないかって言われたらいかなきゃいけないだろ？だから、アルバムが遅れる可能性があるとしたら、ツアーの為だと思ってもらっていいと思う」

――バッド・レリジョンのことを自分達ではどうとらえていますか？ロック・バンド？それともパンク・バンド？

「自分のバンドが何者かは全然考えないからねぇ。ただロック・バンドで思い出すのは、ガンズン・ローゼスとかで、彼らがロック・バンドなら、僕らはパンク・バンドかもしれない。でもランシッドがパンクなら、僕らはちょっと違うだろうし。どこにフィットするのかよく分かんないんだよね、自分でも。パンクに関して自分達が言いたいことは、いっぱいあって言いたいことを正直に表現するといった姿勢的にはパンクなのかもしれないし。人任せにしないとかね。まぁ自分達を何と呼ぶかは、むしろ聴く側が決めてくれればいいんじゃないの。ジャーナリストはいつも読者にわかりやすいような、単に比較するだけの為かもしれないけど、新しいフレーズを作り出すのが上手だから。始めた当初、僕たちがパンクと呼ばれていたのは、いわゆるパンクっていわれる人達と一緒にプレイしてたからだろうと思うし。今は果して自分達がどこに入るのか分からない。いつも混乱した状態にあるってことかな(笑)」





BAD RELIGION

interview